

—

次の文章は、一九六五年の大阪を舞台にした小説の一節です。十八歳の予備校生である「ぼく」は、中之島の図書館に通いつめて、読書に熱中する日々を送っていました。読んで、あとの問いに答えなさい。

読書に、ある種の**喜び**と充実を感じるようになったのは、九月に入ってからだった。そしてちょうどその頃、ぼくは*1有吉が腰の病気で入院したことを知った。腰の中心部に集まっている神経の病気がらしく、草間は電話口で何やら難しい病名を言った。ぼくはデパートの食料品売場をさんざん歩き廻ったあげく、結局メロンを一個お見舞いに買って、草間との待ち合わせ場所へ急いだ。草間も同じように、メロンがひとつ入った箱を持って待っていた。

「こんなときでもない、こういう贅沢な果物を腹いっぱい食べるチャンスはないからなア」と草間は言った。

ぼくたちは、暑い日差しの中を歩いた。桜橋から出入橋まで行き、交差点を左に折れて堂島川の方へ十五分ばかり行くと、川沿いに大学の附属病院が見えて来た。日陰はひんやりしていたが、直射日光はまだ夏のもので、草間の鼠色のポロシャツの背が汗で黒ずんでいた。有吉は六人部屋の、いちばん奥のベッドにいた。そこからは川が見え、淀屋橋へつづいていくオフィス街のにぎわいが眺められた。

「親父が、病気のときは神経を使うな、もう一年浪人してもええから、いっさい勉強はしたらあかんて言いよるんや。来年落ちたら、家の運送屋を手伝わせるて言うとなつたのに、えらい変わりようや」

有吉はベッドの横の台に積んだ十数冊の参考書を足の甲で軽く押すと、

「こんなしょうもない腰の病気で、また一年間を棒に「1」たり出来んよ。来年は滑り止めに、S大の医学部も受けることにした」

そう言って笑った。

「S大なら、勉強せんでも通るでエ。有吉の実力やったら百パーセント合格やがな」

草間の言葉をついで、ぼくは何か励ましになるようなことをと思い、

「優秀な医者になるには、自分も多少は病気を経験しといたほうがええんや。病人の気持がちゃんと判るがな」

と言った。そして、どんな具合なのか症状を訊いた。有吉は体の向きを変え、腰の真ん中を押さえて、ここに鉄の玉が詰まっているみたいな感じなのだと説明した。

「一種の神経痛みたいなものらしいけど、ちゃんと治療しとないと、一生の持病になってしまうそうや」

それから、長く伸びた頭髮の乱れをなおしながら、嬉し^①そうに囁いた。

「おい、医者にはカッコエえぞオ。患者にも看護婦にも、もう絶対的な優位に立ってる。こんなええ職業はほかにない。ただ、想像以上の肉体労働やから、体を鍛えとくとあかんぞオ」

ぼくは病院を出ると草間と別れた。草間は受験勉強があったし、ぼくは*₂カミュの小説のつづきを読まなくてはならなかったからだ。Ⅱ別れしな、草間は不思議そうな顔つきで言った。

「お前、何のために、そんなに意地みたいに本を読んでるんや？」

ぼくは答えようがなかったから、苦笑いを浮かべて手を振ると、川沿いの道をとぼとぼ歩いて行った。

ぼくと草間は九月末と十月の半ばにも有吉を見舞った。薬の副作用で下痢がつづいてはいるらしかったが、有吉の様子が変わったところは見られなかった。ところが、十一月十日、四度目の見舞いにひとりでおもむいたとき、ぼくは有吉の病状が尋常^{じんじょう}なものではなかったことを知った。十日程前に移ったとかで、有吉は病棟の端にある個室のベッドに臥^ふしていた。たったひと月あまりの間で、有吉は変わり果ててしまっていた。顔はふたまわりほど小さくなり、膝^{ひざ}から下がむくんでいた。薄い胸の下に膨^{ふく}れた腹があった。ぶ厚い蒲団^{ふとん}を掛けてあっても、有吉の体の異常さがうかがえたのである。付き添っていた母親は、ぼくが病室に入ると、ちよつと売店に用事があるからと言って出て行った。ぼくは言葉を喪^{うしな}って、早々に退散するきっかけを見つけ出そうと落ち着きなく椅子に腰かけていた。Aシヨトウの夕暮が落ちて来ていた。有吉はあおむけに寝て、首を窓に向けたまま、ぼくに話しかけようともせず、じつとⅢ暮れ^{くれ}なずむ空に目を向けていた。ぼくが何か喋^{しゃべ}らなくてはならぬと思ひ、言葉を選んでみると、

「きのう、草間が来たよ」

有吉は顔を「2」たまま聞き取りにくい声で言った。

「俺、何をやっても、あいつには勝たれへんような気がしてたけど、やっぱりそうやったなア」

「草間のやつ、俺の妹に気があるんやけど、妹はお前のことが好きなんや」

「……俺は、犬猫以下の人間や」

ぼくは驚いて、臥^ふしている有吉の耳から顎^{あご}にかけての鬚^{かげ}を見つめた。

「なんで、そんなことを言うんや？」

有吉はそれには答えず、深いため息をついた。有吉が窓の向こうから目を離さないのは、顔を見られたくないからかも知れないと思ひ、ぼくは立ちあがってドアの横の小さな鏡に自分を映した。ぼくは何かに祈りたかった。俺は犬猫以下の人間やと有吉が呟^{つぶや}いたとき、ぼくは烈^{はげ}しい恐怖と憂愁に、夕暮の彼方から手招きされているような気持にBツツ^つまれたのだった。逃れようのない決定的な絶望に勝つためには、人間は祈るしかない筈^{はず}だった。ぼくが立ちあがったのは帰るためだと有吉は思ったらしく、はじめて顔を向けて、

「またな」

と言った。ぼくがぼんやりと立ちつくしていると、有吉はもう一度、
「またな」

と言つて、笑つた。

有吉はそれから二十日後の、十一月三十日の明け方に死んだ。死んでから、ぼくと草間は、有吉の C チョウが癌がんにやられていたことを知った。手遅れの癌で、両親は最期まで誰にも真相を明かさなかつたのである。

自分が、いままさに死にゆかんとしていることを知らないままに死んでいく人間などいないと、ぼくは思う。そうでなければ、人間が死ぬ必要などどこにもないではないか。人間は、そのことを思い知るために、死んでいくのだ。有吉の死後、ぼくが②読書すら放擲して考えつづけたことは、それだった。だが何のために、そんなことを思い知らなくてはならないのか、ぼくには判らなかつた。それを考えると、なぜかぼくは何か祈りたくなるのだった。

有吉が死んでからは、ぼくと草間とは IV 疎遠そえんになつた。草間はその猛烈な勉強ぶりにいつそう拍車はくしゃを「3」始めたし、ぼくはぼくで、③ある新しい熱情に駆かられて小説に読みふけるようになったからだ。その熱情とは、すでにとうの昔にこの世からいなくなつた多くの作家たちが、生きているときに何を書かんとしたのかを知りたいという願望がんぼうだった。死人が小説を書ける筈はずなどなかつたから、ぼくが捜さがし出そうとしていたことは馬鹿げたお遊びに近かつた。だが、その馬鹿げたお遊びは、有吉の死がぼくに与えた後遺症ごいしやうだったのだ。ぼくはまもなく後遺症から立ち直り、あらゆる物語を「死」から切り離して考えるようになった。すべては「死」を裏づけにしていたが、「死」がすべてである物語は存在しなかつたからである。
(宮本輝『星々の悲しみ』)

【注】 *1 有吉……草間と高校時代から行動を共にしている予備校生。二人とも「ぼく」と同い年で同じ予備校に通っており、

二人で図書館にいた時に「ぼく」を見かけて声をかけ、親しくなつた。

*2 カミュ……アルベール・カミュ (Albert Camus 一九一三～一九六〇)。フランスの作家。

(一) —— AとCのカタカナを漢字に改めなさい。

(二) 「1」「3」を補う言葉として最もふさわしいものを、次のア～カより選び、記号で答えなさい。同じ記号を二度以上選んではいけません。

ア 上げ イ かけ ウ 奮つ エ 振つ オ そろえ カ そむけ

(三) ~~~~~ I～IVのここでの意味として最もふさわしいものを、次のア～オよりそれぞれ選び、記号で答えなさい。

I 言葉を ついで

ア 言葉に 続けて
イ 言葉の 途中とちゆうで
ウ 言葉を 伝えて
エ 言葉を 返して
オ 言葉に 甘あまえて

II 別れしな

ア 別々に
イ 別れぎわわ
ウ 別れても
エ 別れが たく
オ 別れた あと

III 暮れな ずむ

ア 刻一刻と 暮れて いく
イ またたく間に 暮れた
ウ 気持ちまで 暗くする
エ すっかり 暗くなつた
オ 暮れそうに 暮れない

IV 疎遠に

ア よそよそしく
イ 全く話さなく
ウ 行き来が 少なく
エ 話がかみ合わなく
オ 互たがひいを 避けるように

四 ——— ① 「嬉しそうに囁いた」とありますが、誰が、なぜ嬉しそうだったのですか。三十字以内で説明しなさい。

五 ——— ② 「読書すら放擲して考えつづけたことは、それだった」とありますが、「ぼく」はこの時、十一月十日の有吉について、
どういうことを考えていましたか。三十字以内で説明しなさい。

六 ——— ③ 「ある新しい熱情」とは、どういう思いを指していますか。最もふさわしいものを、次のア～オより選び、記号で答えなさい。

- ア 有吉の死を忘れないために、あらゆる作家の言葉を死に結びつけて考えたい、という思い。
- イ 大昔に亡くなった多くの作家たちの、作品に宿っている永遠の命に触れたい、という思い。
- ウ 作家たちが物語にちりばめた答えをたよりに、命のはかなさについて考えたい、という思い。
- エ それぞれの限りある時間の中で、作家たちの残した貴重な言葉に耳を傾けたい、という思い。
- オ 有吉の両親が明かさなかった死の真相を、作家たちの死に重ねてつき止めたい、という思い。

国語の問題は、次のページに続きます。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

電話口へ呼び出されたから受話器を耳へあてがって用事を訊いて見ると、ある雑誌社の男が、私の写真を貰いたいのだが、何時撮りに行って好いか都合を知らしてくれろというのである。私は「写真は少し困ります」と答えた。

私はこの雑誌とまるで関係を有って「1」。それでも過去三四年の間にその一二冊を手にした記憶はあった。人の笑っている顔ばかりを沢山載せるのがその特色だと思つた外に、今は何にも頭に残っていない。けれども其所にわざとらしく笑っている顔の多くが私に与えた不快の印象はいまだに消えずにいた。それで私は断わろうとしたのである。

雑誌の男は、卯年の正月号だから卯年の人の顔を並べたいのだという希望を述べた。私は先方のいう通り卯年の生れに相違なかった。それで私はこう云つた。――

「あなたの雑誌へ出すために撮る写真は笑わなくつては不可いのでしよう」

「いえそんな事はありません」と相手はすぐ答えた。あたかも私が今までその雑誌の特色を誤解して「2」。

「当り前の顔で構いませんなら載せて②頂いても宜しゅう御座います」

「いえそれで結構で御座いますから、どうぞ」

私は相手と期日の約束をした上、電話を切つた。

中一日置いて打ち合せをした時間に、電話を掛けた男が、綺麗な洋服を着て写真機を携えて私の書斎に這入つて来た。私はしばらくその人と彼のAジューズしている雑誌について話をした。それから写真を二枚撮つて貰つた。一枚は机の前に坐っているB平生の姿一枚は寒い庭前の霜の上に立っている普通の態度であつた。書斎は光線が能く透らないので、機械を据え付けてから*マグネシアを燃した。その火の燃えるすぐ前に、彼は顔を半分ばかり私の方へ出して、「御約束では③御座いますが、少しどうか笑つて頂けますまいか」と云つた。私はその時突然微かな滑稽を感じた。然し同時に馬鹿な事をいう男だという気もした。私は「これで好いでしよう」と云つたなり先方の注文には取り合わなかつた。彼が私を庭のC木立の前に立たして、レンズを私の方へ向けた時もまた前と同じ様な鄭寧な調子で、「④御約束では御座いますが、少しどうか……」と同じ言葉を繰り返した。私は⑤前よりも猶笑う気になれなかつた。

それから四日ばかり経つと、彼は郵便で私の写真を届けてくれた。然しその写真は正しく彼の注文通りに「3」のである。その時私は中が外れた人のように、しばらく自分の顔を見詰めていた。私にはそれがどうしても手を入れて笑っているように拵えたものとしか見えなかつたからである。

私は念のため家へ来る四五人のものにその写真を出して見せた。彼等はみんな私と同様に、どうも作って「4」という鑑定を下した。

私は生れてから今日までに、人の前で笑いたくもないのに笑って見せた経験が何度となくある。その偽りが今この写真師のために復讐を受けたのかも知れない。

彼は気味のない苦笑を洩らしている私の写真を送ってくれたけれども、その写真を載せると云った雑誌は遂に届けなかった。

(夏目漱石『硝子戸の中』)

【注】 * マグネシア………当時はフラッシュとして、マグネシウムを主成分とした粉を燃やしていた。

(一) —— Aのカタカナを漢字に改め、—— B・Cの読み方をひらがなで答えなさい。

(二) 「1」 「4」を補う表現として最もふさわしいものを、次のア〜クより選び、記号で答えなさい。同じ記号を二度以上選んではいけません。

ア	みた	イ	いたために	ウ	いなかった	エ	笑わたものらしい
オ	いた	カ	いた如くに	キ	笑っていた	ク	笑っている筈がない

(三) —— ① 「『写真は少し困ります』と答えた」とありますが、筆者はなぜそうしたのですか。四十字以内で説明しなさい。

(四) ——— ②「頂い」、——— ③「御座います」について、

I 誰から誰への敬意を表していますか。次のア〜オから選んで、記号で答えなさい。

ア 筆者 イ 読者 ウ 筆者の家族 エ 雑誌社の男 オ 卯年の正月号を買うだろう人達

II 同じ意味の、敬語でない言葉に改めなさい。(例 おつしやつた ↓ 言つ)

(五) ——— ④「御約束」とは、話し手が筆者にした、どういう約束ですか。十五字以内で説明しなさい。

(六) ——— ⑤「前よりも猶笑う気になれなかった」とありますが、筆者はなぜそう感じたのですか。最もふさわしいものを、次のア〜オより選び、記号で答えなさい。

ア 何度もたのまれるとつい笑って見せてしまうかもしれないと、かつての経験を思い出して用心しはじめたから。
イ 上辺だけ丁寧な言葉を繰り返されて、相手の男には筆者の意向を尊重する気など全くないのだとわかったから。
ウ 電話を受けた時は丁寧だった相手の態度にひどく横着なものを感じ、引き受けなければよかったと思ったから。
エ 電話で話した時は雑誌社の方針を誤解していたと反省したが、やはりこの雑誌には載りたくないと思ったから。
オ 一枚目は相手の注文に取り合わなかったが、今度も断れば、おそらく向こうで手を加えるだろうと思ったから。

三

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

どうして神さまは、「個性」など生み出したのだろう。

① どうして、私たちには、個性があるのだろうか。

「オナモミ」という雑草がある。

トゲトゲした実が服にくっつくので「くっつき虫」や「ひっつき虫」とも呼ばれている。実を服につけて飾りにしたり、手裏剣しゅりけんのように投げ合って遊んだりした人もいるかもしれない。

オナモミのトゲトゲしたものは、タネではなく実である。この実の中にはタネが入っている。オナモミの実の中には、二つの種子が入っている。

この二つの種子は性格が違う。二つの種子のうち、一つはすぐに芽を出すせつかち屋、そしてもう一つは、なかなか芽を出さないのんびり屋である。

このせつかち屋の種子とのんびり屋の種子は、どちらがより優れていると言えるだろうか？

早く芽を出した方がよいような気もするが、そうでもない。

急いで芽を出しても、成長に **A** テキした時期かどうか分からないのだ。仮にテキした時期だったとしても、問題はある。オナモミは雑草である。気まぐれな人間が、いつ草取りをするかわからない。その場合は、ゆっくりと芽を出した方がよいかもしれない。

早く芽を出す種子と、遅く芽を出す種子はどちらが優れているのだろうか？

そんなことは、わからない。

早く芽を出す方が有利なときもあるし、遅く芽を出す方が成功するときもある。

「1」オナモミは、性質の異なる二つの種子を用意しているのである。

私たち人間は、状況判断を迫られるとどちらが優れているのか、比べたがる。

どちらが良いのか、答えを求めたがる。

しかし、実際には答えのないことが多い。

本当は答えなどないのに、人間はさも答えがあるようなフリをしている。そして、さもわかったようなフリをして、「これは良い」とか、「それはダメだ」と言っている。

わかったつもりでいるだけなのだ。

本当は答えなどない。

何が優れているかなど本当はわからない。

答えがないとすれば、どうすれば良いのだろうか。

それは簡単である。オナモミの例に見るように、両方用意しておけば良いのである。

答えがわからないから、たくさんの選択肢せんたくしを用意する。

それが生物たちの戦略なのである。

生物がたくさんの選択肢を用意することは「遺伝的多様性」と呼ばれている。

しかし、不思議なことがある。

自然界の生物は遺伝的多様性を持つ。

それなのに、「みんなが同じ」という生き物も多い。

多少の個体差はあるものの、たとえば、^②ゾウはみんな鼻が長い。鼻が短いという個性はない。キリンもそうだ。首が短いキリンはいない。チーターはみんな足が速い。人間は足が速かったり、遅かったりするのに、チーターはどれも足が速い。どうして、足の遅いチーターはいないのだろう。

それはチーターにとって足が速いことが答えだからである。答えがあるときには、生物はその答えに向かって進化をする。獲物を追いかけて捕らえるチーターにとって足が速い方が有利である。「足が遅いよりも足が速い方が良い」というのが、チーターにとつての答えだ。だから、チーターの足の速さに個性はないのである。

ゾウも鼻が長いことが正解だ。キリンも首が長いことが正解だ。答えがあるときに、そこに個性は必要ないのである。

それでは答えがないときはどうだろう。何が正解かわからない。何が有利かわからない。そのときに生物はたくさんの答えを用意する。それが「たくさんの個性」であり、遺伝的な多様性なのだ。

人間も同じである。

人間の目の数は、二つである。そこに個性はない。答えがあるものに個性はないのだ。

しかし、人間の能力には個性がある。顔にも個性がある。性格にも個性がある。

生物はいろいろな個性は作らない。

個性があるということは、そこに意味があるということなのだ。

人間は足の速い人と、足の遅い人がいる。

それは、足の速さに正解がないからだ。

足が速い方がいいに決まっていると思うかもしれないが、そうではない。

生物の能力は「トレードオフ」と言って、どれかが良いとどれかが悪くなるようにバランスが取れている。「2」、足が長ければ歩幅が大きくて速く走れるかもしれない。「3」、重心が高くなるので、不安定になって、転びやすくなるかもしれない。背が高ければ遠くまで見渡せて、テンテキを見つけやすいかもしれないが、草陰に隠れるときには、背が低い方がいい。

「X」

どちらが良いかわからないのであれば、どちらも用意しておくのが生物の戦略だ。

人間に足の速い人と足の遅い人がいるということは、足が速いことはそうでなければ生きていけないというほど重要ではないということだ。もちろん、足が速いことはすばらしいことだけれど、他の能力で足が遅いことはカバーできる。他の能力を捨ててまで、チーターのように人類みんなで足が速くならない方がいいというのが、おそらくは人間の進化なのだ。ただし、それだけではない。

人類には人類の特殊な事情がある。

生物としての人間の強みは何だったろう。

それは、「弱いけれど助け合う」ということだ。

ふしぎなことに、古代の遺跡からは、歯の抜けた年寄りの骨や、足をけがした人の骨が見つかるらしい。「4」、狩りには参加できないような高齢者や傷病者の世話をしていたのだ。

人間は他の生物に比べると力もないし、足も遅い弱い生物である。だから知恵を出し合って生き抜いてきた。

知恵を出し合って助け合うときには、経験が大切になる。経験が豊富な高齢者や危険を経験した傷病者の知恵は、人類が生き抜く上で参考になったのだらう。色々な人がいれば、それだけ色々な意見が出るし、色々なアイデアが生まれる。

そうして、人類は知恵を出し合い、知恵を集めて、知恵を伝えて、ハッテンをしてきたのだ。

自然界は優れたものが生き残り、劣ったものは滅んでいくのが掟である。

もつとも、何が優れているかという答えはないから、生物は多様性のある集団を作る。しかし、年老いた個体や、病気やケガをした個体は、生き残れないことが多い。

しかし、人間の世界は、年老いた個体や病気やケガをした個体も、「多様性」のイチインにしてきた。それが人間の強さだったのだ。

人間の世界には「弱い者をいじめてはいけない」とか、「人間同士で傷つけ合ってはいけない」とか、生物の世界とは違った法律や道徳や正義感がある。

残念ながら有史を振り返れば、人々が殺し合う戦争や弱い者が虐げられる歴史は繰り返されている。しかし、それでも人は、そのようなことは悪いことだ、人々は愛し合い助け合うのが本来の姿なのだとの底で信じている。

それはけつして人間が慈愛じあいに満ちた生き物だったからだけではない。それは長い人類史の中で人間が少しづつ培つちかってきたものでもある。③ そうしなければ人間は自然界で生きていけなかったのだ。

(稲垣榮洋『ナマケモノは、なぜ怠なまけるのか?』)

(一) —— AとDのカタカナを漢字に改めなさい。

(二) 「1」も「4」を補う言葉として最もふさわしいものを、次のア～クより選び、記号で答えなさい。同じ記号を二度以上選んではいけません。

ア	だから	イ	つまり	ウ	そのうえ	エ	たとえば
オ	そして	カ	しかし	キ	ちなみに	ク	ところで

(三) 「X」を補う一文として最もふさわしいものを、次のア～オより選び、記号で答えなさい。

ア 帯に短し、たすきに長し。
イ どんぐりの背比べ。
ウ 船頭多くして船山に上る。
エ あちらを立てれば、こちらが立たず。
オ 背に腹はかえられない。

四 ——— ① 「どうして、私たちには、個性があるのだろうか」とありますが、筆者は、生物にとって「たくさんの個性」とは何であるかと述べていますか。生物が個性を持つ理由をふまえて、四十五字以内で説明しなさい。

五 ——— ② 「ゾウはみんな鼻が長い」という例をあげること、筆者はどういうことを述べようとしていますか。その答えに当たる十三字の表現を、「ということ」に続くように本文よりぬき出しなさい。

六 ——— ③ 「そうしなければ人間は自然界で生きていけなかったのだ」とありますが、人間はどのように自然界を生きぬいてきたと、筆者は述べていますか。最もふさわしいものを、次のア～オより選び、記号で答えなさい。

- ア 社会という集団を作り、個々の能力を生かした役割分担をすることで、個体の弱さを補いながら、生きぬいてきた。
- イ 互いに傷つけ合わないという独自の法律や道徳を作り、強固に統合された社会を形成することで、生きぬいてきた。
- ウ 多様な経験から得られる様々な知恵を集めて共有し、それらの知恵を生かして助け合うことで、生きぬいてきた。
- エ 劣ったものを含むすべての個体が生き残れるように、弱者を守るための仕組みを構築することで、生きぬいてきた。
- オ 他の生物に劣る身体能力はあえて退化させ、知恵という人間特有の能力を伸ばしていくことで、生きぬいてきた。